受賞者の業積

木村　宏　子氏　44歳(青森県・助産婦)

弘前大学で15年間にわたり、母性小児看護学、母性保健、育児家庭看護学を教え、母子保健指導者の育成に努め、同時に弘前市とその周辺の市町村を中心に、数多くの現場活動をして、住民と密着した大学の役割等、多くの調査・研究を行い、地域の母子保健指導の向上に役立てている。

また夜は地域のボランティア活動で婦人学級、青少年学級の講師などで活躍。

佐々木　康　子氏　48歳(岩手県・保健婦)

就任当時の三陸町は衛生管理の予算は微々たるもので、衛生思想もきわめて低く、へき地が多いことから乳児死亡、死産率等は県内でも最悪の状況であった。

専門医のいない町内で未熟児が生まれると宿泊をして看護をしたり、衛生教育を夜行ったり、ハイリスク妊婦の管理、地区組織の育成など幅広い活動をして、ついに56・57年と念願の乳児死亡ゼロを達成。

坂内　光　子氏　48歳(福島県・保健婦)

北会津村は複合家族が多く、妊婦の60%は農業以外の勤務者で、妊娠届出は多くが家族により届けられ、妊娠届に来所しなかった者、母親教室に不参加の者などに、低体重児の出生や周産期死亡が多いことが判明し、妊婦全員に初期からの健康教育を実施。

異常妊婦の早期発見のため、家庭訪問、部落の巡回健康相談を広げるなど、着々と成果をあげている。

斉　藤　サト子氏　54歳(栃木県・保健婦)

昭和35年当時の烏山町の乳児死亡は、県平均よりはるかに高かったため、家庭訪問に重点をおき、乳児死亡の減少に取り組み、20年後の昭和57年にはついに乳児死亡ゼロを達成。

1歳6ヵ月児・3歳児健診状況も年々向上し、児童相談所との連携を密にするなど異常者の早期発見、早期治療に尽力。現在は健全育成、障害児出生の未然防止のために、各種の調査を実施中である。

遠　山　美　雪氏　37歳(山梨県・保健婦)

大和村の愛育班は、それまで婦人会愛育部として活動していたが、49年着任と同時に単独の組織とし、定期的に生活に密着した問題を取り上げて学習し、「声かけ運動」「ノー靴下運動」などを展開。

また子どもと老人の骨折が多いことから糖分の摂取量を減らし、カルシウムの必要量を普及したり、健康まつりを開催するなど、母子管理を成人まで連携できるよう努力を重ねている。

岡　庭　幸　子氏　44歳(長野県・保健婦)

昭和40年、上郷町の保健婦に就任以来、母親学級、乳児家庭訪問、乳幼児健診、股関節検診などを行い、特にハイリスク児の早期発見とその対処のため、4ヵ月児と7ヵ月児健診を行い、日本版デンバー式発達スクリーニング検査法を導入。

また乳幼児の歯の健康活動に積極的に取り組んだり、若妻会、婦人学級の育成に力を入れ、地域に出向いて相談指導にあたっている。

市　來　愛　子氏　45歳(富山県・保健婦)

人口31万都市である富山市の母子保健の改善は困難で、市医師会と連携をとり、既成組織の活用を図りながら、地域に応じて母子保健活動の企画・推進をし、事業の拡大と総合化に努め、効果をあげている。

乳幼児に対しては、電算処理により全乳児を把握。まなダウン症児の母子のつどい、母と子のふれあいグループを結成するなど地区組織の育成にも精力的に取り組んでいる。

森　下　増　子氏　41歳(福井県・準看護婦)

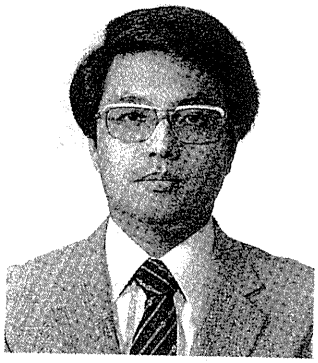
県下有数のへき地である池田町は労働過重、低栄養による貧血者も多く、未熟児発生、乳児死亡は県下でも高率を示していたため、保健事業全般に積極的に取り組み、ついに乳児・新生児死亡、周産期死亡の3年間ゼロを達成。

丈夫な赤ちゃんを生むための事業として、青年団等の婚前学級、新婚家庭訪問など実施し、保健婦設置を上申し続け、59年度には保健婦採用の実現もみた。

古　田　陽　子氏　49歳(岐阜県・助産婦)

昭和38年に美濃市に助産院を開業以来22年間、採算を度外視した経営と、その人柄を慕い、市外からの入院も多く、妊産婦の保健指導、分娩介助を実施。その間疼痛を伴わない独自の乳房管理法をあみ出し、母乳分泌は入院中に旺盛になり、1ヵ月健診時には80%の高率を占めている。

またうぶ声・手型・足型など成長記録を母親に記念に渡すなどユニークな活動を行っている。



久　　靖　男氏　43歳(大阪府・産婦人科医)

府立母子保健総合医療センターの建設準備の時期から、理想的な母子管理、特にハイリスク管理を目指し、各種の実態調査を行い、周産期医療、母子保健活動の問題点を明確にし、センターの業務量の算定、地域医療機関との連携、ハイリスク妊婦の受け入れを24時間体制で行うなど府下の妊産婦死亡を半減させるなど大きく貢献。

今後は開業医の立場で地域社会への貢献が期待されている。

小　池　恭　弘氏　45歳(奈良県・歯科医)

奈良県歯科医師会の公衆衛生委員長として活躍中で、県医師会が実施する県内の幼稚園と母親を対象に、昭和51年より歯科衛生、特に食後の口腔内清掃を普及させ、幼児う歯の減少に多大の貢献をした。

また保健関係者の歯科講習会、1歳6ヵ月児・3歳児健診の歯科健診に積極的に協力。幼児のむし歯ゼロにするために、強い乳歯づくり、ひいては妊娠中、近い将来母となる高校生の指導・啓蒙にあたっている。

奥　田　ふさ子氏　47歳(和歌山県・主婦)

昭和46年日高町に母子保健推進員制度発足と同時に、推進員に委嘱され、家業に従事しながら乳幼児や妊産婦の家庭訪問を積極的に実施し、路線バスも廃止された担当地区で単車を利用し、受け持ち地区の全妊婦、新生児をきめ細かく訪問活動を行っている。

また妊娠届、母親教室、妊婦健診、乳児健診の勧奨など、一貫した母子保健対策をつくりあげていく大切なパイプ役となっている。

和　田　　薫氏　49歳(島根県・保健婦)

石見町は山間へき地で、昭和30年ころはほとんどが自宅分娩で、妊娠中1回の健診も受けずに出産する人や、死産・中絶も多く、母子健康センター設置の必要性を展開。

以来34年に母子健康センターが設置され、分娩・助産業務、妊婦健診、乳児相談、母子保健班など地区組織の育成など積極的に母子保健活動を行い「よい子を生みよい子を育てる」運動を繰り広げ、これらの原動力となった。

池　田　照　子氏　51歳(香川県・主婦)

引田町の母子保健対策は遅れており、母子問題の解決には若い母親の自覚と近隣愛が重要であることから組織づくりに積極的に取り組み、昭和35年母子愛育会の結成に会長補佐役として活躍。59年には香川県母子愛育連合会会長に就任し、127単位組織を指導している。

豊かな人間性と行動力は、母子愛育の精神そのものと会員から信頼され、地域ぐるみできめ細かく啓発。

賀　久　は　つ氏　48歳(福岡県・助産婦)

昭和46年に母と子のサロンを開放することにより家族計画相談、育児相談、特に産褥期の母性グループに対し、適切な指導、援助を行い、病院と家庭の谷間をなくすために努力。

53年には「むなかた助産院」を開設。よい家庭とよい人格形成を目指し、また地域の保健医療チームの一員として活躍し、助産婦養成にも情熱をそそぎ、学生からは、モラルの高い助産婦と尊敬されている。